

特集に当って

木嶋 恭一

最近、特にイギリスを主としてヨーロッパのOR (Operational Research)、経営科学、システム科学、システム工学等の分野において、人間を含む問題対象に対するアプローチとして、ソフト・システムズ・アプローチと呼ばれる新しい方法論が盛んに議論され、そのための新しい学術雑誌も発刊されようとしている。しかしながら、わが国ではまだそれほどこのようなアプローチが浸透しているとはいえ、このようなアプローチの存在さえあまり認識されているとは思えない。

本特集が「ソフト・システムズ・アプローチ」というテーマのもとで企画されたのは、以上の背景を踏まえ、従来のOR/システム工学的なアプローチとは異なるソフト・システムズ・アプローチの紹介とその実際的な意味に焦点を当て、その認識を深めるためである。

最初の中野論文は、ソフト・システムズ・アプローチに限定せず、いったいシステムズ・アプローチとはなんなのか、また従来のアプローチとはどこが違うのかについて検討している。システムズ・アプローチが生まれてきた経緯からその特徴、分類にいたるまでの考察は、きわめて漠然と使われることの多い「システムズ・アプローチ」という語に明解なイメージを与えている。

次に、北原論文は、以下で紹介される種々の具体的なソフト・システムズ・アプローチの背後にあるソフトシステム思考について、その意義と「今なぜソフト論なのか」を議論している。まず、現代科学の特徴を考察し、それに依拠するハード論の盲点を指摘する。これに對比してソフトシステム思考を取り上げ、その特徴を述べ、さらには、現代社会に進行するソフト化の現象を主に経済的な側面から言及している。

続く2編の論文は、ともに、ソフトシステム方法論をはじめとするイギリスにおけるソフト・システムズ・アプローチを紹介し、それに考察を加えたものである。木

嶋論文はソフトシステム方法論といゆるソフトORについて紹介し、それらのもつ「ソフト性」にも言及している。ジャクソン論文は、「方法論と問題状況の格子」という従来からの主張を、特に本特集のためにコンパクトに書き下したものである。翻訳の労をとられた飯島淳一氏に感謝したい。この論文につけられた豊富な論文リストはこの方面の有用な情報源となると思われる。ジャクソン氏はオックスフォード大学出身の新進気鋭の研究者で、J. of Operational Research Society等の誌上で活躍しているほか、連合王国システム学会のキーパーソンでもある。

5番目の平野論文は、1960年代に日本に紹介されたソフト手法であるワークデザインと、70年代にイギリスで開発されたソフトシステム方法論について比較検討を行なったものである。前者が教育や実践を通して日本に定着していったのに対して、後者が日本の風土に根づくかどうかは今後の課題であり、日本化したバージョンが生まれることを期待したいところである。

最後の妹尾論文は、実務サイドからみたソフトシステム方法論の実践的な有効性について議論したものである。妹尾氏は、現在イギリス、ランカスター大学のチェックランド教授のもとに留学中の実務家で、現在の環境を生かした、現実的で具体的な議論を行なっている。

世界で提唱されているソフト・システムズ・アプローチをすべて紹介することは、もちろん不可能でもあるし、本特集の趣旨でもない。しかし、ソフトシステム思考にもとづいた数多くの方法論が開発され、企業のコンサルタント業務などに実際に用いられ成果をあげているというのは事実である。漠構造的な組織風土をもったわが国からのこの方面への貢献が望まれるところである。